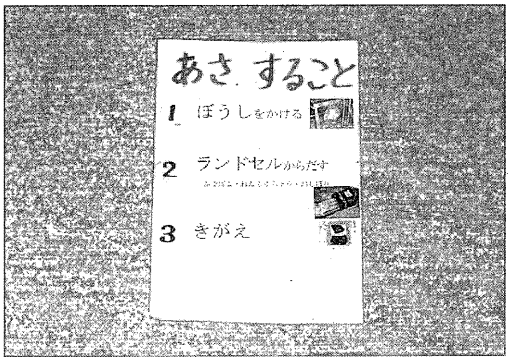
（２）校内の環境整備

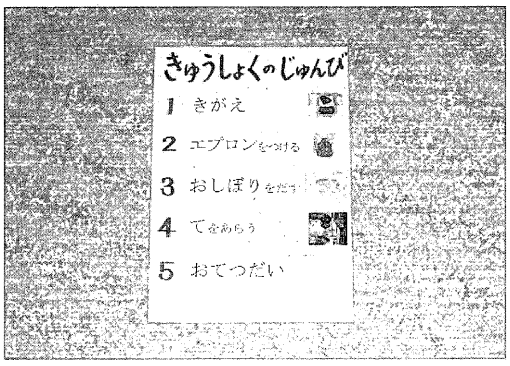
子どもたちが過ごす環境の中に、子どもたちにとっての「わかる」が多く存在することは、子どもたちの情緒を安定させ、子どもたちがより主体的に学習活動に取り組む助けの一つになると考える。特に、聴覚的認知よりも視覚的認知が優位な子どもたちにとっては、視覚的な働きかけが有効な手がかりとなってくる。そこで、今年度小学部では、今までの校内の環境について見直し、整備することにした。

①活動の手順表

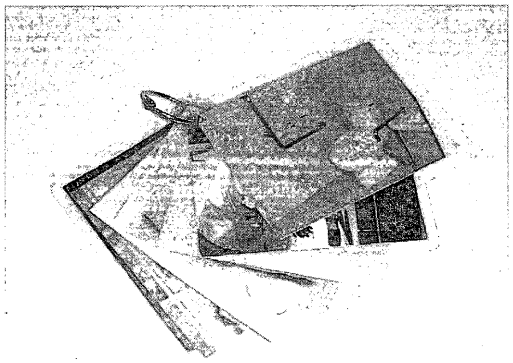
小学部では、ADLの自立を目指して、一人一人の経験の積み重ねを大切にし、学部として一貫した指導を心がけている。衣服の着脱、食事、排泄等の他、子どもたちが毎日行っている活動に「朝すること」「給食の準備」「給食の片付け」「帰りの準備」がある。しかし、それぞれの活動において、活動が滞ってしまい、その都度教師に促されて次の行動に移るという姿が少なくない。そこで、子どもたち一人一人が自主的に、あるいはスムーズに行うことができるように、それぞれの活動について手順表（写真①、②）を作成し、各教室に掲示することにした。この４つの活動の手順・内容については、子どもたちの成長段階等によって各クラスで多少異なる。また、各クラスの子どもたちの様子に応じて、文字以外に写真や絵なども添付した。さらに、この手順表を利用することが難しい子どもには、異なった形式の手順カード（写真③）も作成した。



写真①：「朝すること」の手順表



写真②：「給食の準備」の手順表



写真③：N児専用カード

＜子どもたちの様子＞

（１年生Ｎ児）

文字言語および音声言語でのコミュニケーションが難しいＮ児は、ADLの場面では、ほとんどの活動を教師の助けを受けながら行っており、能動的に次の活動に取り組むことはほとんどない。そこで、活動すべてを記載してある手順表ではなく、次に何をしたらよいのかがわかりやすいように、Ｎ児専用の写真カード（写真③）を作成した。「次は○○だよ」と写真カードを指さしながら提示すると、自ら次の活動に移る姿が見られるようになった。

（２年生Ｈ児）

Ｈ児は、次に何をしたらよいのかある程度わかってはいるが、気持ちが集中せず活動が滞ってしまうことが多い。教師がＨ児に手順表を指さし「次は何かな？」と声をかけると、手順表の文字を読み、その後の活動を行うことができるようになってきた。

（４年生Ｂ児）

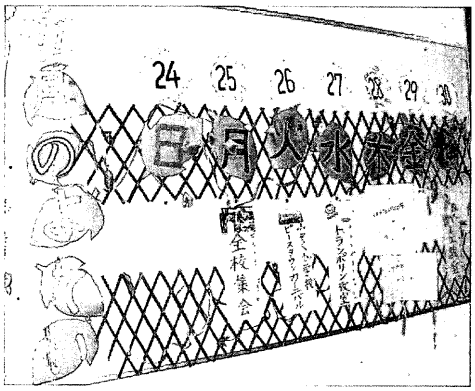
活動の途中で他に興味のあることに気持ちがそれてしまったときに、教師が「次は○番ね」と声をかけると手順表を指さしにきてからその後の活動に取り組めるようになった。

以上のように、視覚的な手がかりとして手順表を使用することによって、数名の子どもたちに自分の行動を調整し、主体的に行動する姿が見られた。一方、特に高学年のクラスでは、積み重ねによって各活動がほぼ身についている子どもが多く、手順表を使用する場面がほとんどなかった。

また、取り組みを通して、小学部での一貫性という視点から教師が活動の流れ、内容を確認するためにも手順表は有効であると感じた。

②週予定表

遠足や歯科検診など普段の活動と異なる活動があると、それをすぐに受け入れることができなかったり、見通しがもてず情緒が不安定になったりする子どもがいる。しかし、子どもが事前にいつどのような行事があるかを知ることで、それが突然の変化としてではなく、予定としてその活動を受け止めることができる。また、大好きな活動があることを事前に知ることで、楽しみにしながらその活動を待つこともできる。そのための一つの手がかりとして週予定表がある。昨年度までも、小学部の廊下に週予定表はあったが、今年度、よりわかりやすく、より注目しやすいものを目指して新しいものを作成し、引き続き掲示することにした。（写真④）



写真④：週予定表

主な改良点として以下のものがある。

・スペースを大きくとり、昨年度までのものより文字や絵を大きくする
・学校全体の儀式・学校及び小学部の行事・保健関係の行事・祝日といったカテゴリー毎に文字を色分けする
・季節を感じとれる装飾を工夫する
・具体物（社会見学で行く施設のパンフレットや交流校からの招待状など）の掲示も合わせて行う

＜子どもたちの様子＞

（２年生Ｈ児）
カレンダーに興味のあるＨ児は、よく立ち止まって予定表を眺めている。「○月○日○曜日、○○○」と予定をよく把握している。
（４年生Ｍ児）
週予定表の中に自分の好きな活動があると、そのカードを指で触っている姿がよく見られ、教師が通りかかると「読んで」と催促する。

「見通しをもって学校生活を過ごす」ということを考えるとき、「見通し」は、①の取り組みのように具体的に次に何をするのかという見通しからはじまり、一日の見通し、一週間の見通し、一ヶ月の見通しなど幾つかの段階がある。小学部では、各クラスでも子どもたちの様子に応じて、様々な段階の見通しをもてるような取り組みを行っている。その中で、この週予定表は、一週間の見通しをもって過ごすための有効な手段の一つとなっていると言える。

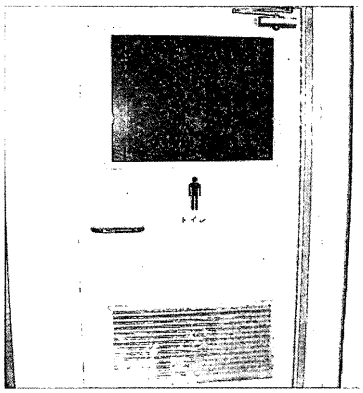
また、４つの改良点の効果もあって、週予定表に興味を示す子どもたちの様子も多く見られ、その中でも大好きな活動を心待ちにしている姿は、週予定表が子どもたちにとって大きな手がかりになっているからだと言えよう。

③シンボルマークの設置

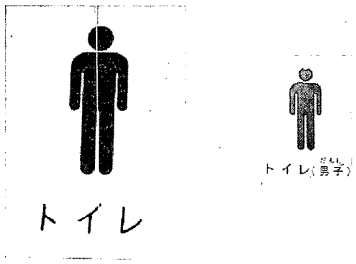
わたしたちが暮らす社会の中には、様々なシンボルマークがあふれている。それを理解し利用できる人にとって、シンボルマークは、社会生活を過ごす中でたいへん便利なものである。そこで、子どもたちにシンボルマークを知り、利用する経験をしてほしいと考え、校内に場所を示すシンボルマークを設置することにした。

シンボルマークを導入するにあたって、設置する場所は子どもたちの利用頻度の多い場所(男子トイレ、女子トイレ、女子更衣室、食堂、プレイルーム、保健室)に限定し、徐々に増やしていくことにした。このシンボルマークは、実際に社会の中でよく目にする、デザインがシンプルで、色のはっきりしたものを既製のデザインの中から選んだ。(写真⑤)
また、マークを設置する位置は、子どもたちの目に入りやすいように子どもの目線の高さに合わせた。さらに、子どもや教師が場所についての情報を伝え合う手段として、ハガキ

サイズにしたカードも各教室に置くことにした。(写真⑥)



写真⑤：トイレのシンボルマーク



写真⑥：ハガキサイズのシンボルマーク（右）

＜子どもたちの様子＞

（２年生Ｈ児）

トイレに入るときに、トイレの扉に貼ってあるカードを見ながらよく触っている。

（３年生Ｓ児）

休み時間に教室でＳ児の前にハガキサイズのカードを並べて「どこにいきたい？」と聞いたところ、プレイルームのカードを選び、プレイルームに遊びに行った。

（５年生Ｙ児）

個別の学習の中で、ハガキサイズのカードを持って、教師とともにそのカードのある場所へ行く活動を行っている。

この取り組みは、教師の側で、どのようにこのシンボルマークを使用していくと子どもたちに有効であるのか試行錯誤の段階である。学校でいつもそのマークを目にすることで、校外においてもマークを意識し、さらには将来利用していくことにつながるのではないかということも含めて、もう一歩踏み込んだ取り組みも考えていきたい。

（原　　恵　一）